

ニッポン ドクター和の 臨終凶巻



横綱・千代の富士（九重親方と呼ぶのが正しいでしょうが、あえてこう呼ばせてください）の特集を先日、テレビで見ました。1周忌追悼番組でした。筋骨隆々、男でもほれてしまうほど美しい全盛期の姿。完璧な肉体を保持していたこの人が、61歳で亡くなるのは、誰が想像したことでしょう。

彼の命を奪ったのは膝臓がんでした。私の同年代の友人も、ここ数年で何人かが膝臓がんで亡くなりました。著名人でも米アップルの共同創業者、ステイーブ・ジョブズさんや歌舞伎役者の坂

20 千代の富士

東三津五郎さん、ジャーナリストの竹田圭吾さんら50代で逝った人の顔が思い出されます。

千代の富士は2015年6月、人間ドックでがんが発覚し、すぐに手術のため1カ月の入院。職務復帰しましたが、その姿は数カ月前の還暦土俵入りの雄姿とは別人のように痩せていたため、重病説

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医科大学卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人を診る」総合診療を目指す。在宅医療まで「薬のやめどき」「痛くない死に方」は「いずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。



が流れました。同年9月には膝臓がんを公表。「早期発見なので問題ない」と語っていたものの、実際は胃や肺などに複数の転移が判明していたのです。

膝臓がんは他のがんに比べ発見しづらく、進行が早いことも特徴。手術が成功し、いったんは完治したように見えても、再発の可能性が非常に高いのが、このがんの怖さです。

千代の富士は再発に対する抗がん剤治療を拒否し、4次元ピンポイント照射療法と呼ばれる特殊な放射線治療を選択します。この選択に対し医療界ではさまざま意見が出ました。「抗がん剤をやったら生きられた」と主張する医師もいれば、「抗がん剤だけではするな」という医師もいます。

私は抗がん剤を否定はしません。しかし、人それぞれに延命と縮命の分水嶺となる「やめどき」があり、自分で見極めることが大切

という考えです。「抗がん剤のやめどき」という拙著で詳しく述べています。

千代の富士の場合、完治を目指す状態ではありませんでした。ですから、彼の選択を後出しジャンケンのように評価するのはどうかと思います。一方「これでがんが消えた」と高価な民間療法を勧める医療機関が存在するのも事実で、患者さんを惑わせ、お金儲けをしている医師には怒りを覚えま

す。

しかし、それすら理解したうえで、お金も持っていて治らないかもしれないが、いちろの望みに賭けることもまた、患者さんの自由ではないかと思う面もあります。

千代の富士は、余命を覚悟したうえでギリギリまで後進の指導を続けるため「抗がん剤はやらな」という選択をしたかと想像します。最後まで「歴史上最も美しく、強い横綱」として生きていたという矜持もあったことでしょう。

余命覚悟貫いた美学

貴花田（後の横綱貴乃花）に敗れた後の引退会見でも引き際的美を見せてくれましたよね。引き際とは、つまりやめどき。男の美学と言ったら女性から怒られるかも知れませんが…。